



「見つかるまで泣かない」

能登半島地震

夫が崩れた自宅の中に 無事願い救助待つ

息子家族が帰省し、いつも同じ正月のだんらんのはずだった。激しい揺れに見舞われた石川県珠洲市の書店経営浅田妙子さん(70)は、自宅が倒壊し、夫三友さん(74)が取り残されている。「見つかるまで泣かないように頑張る」。無事を願い、救助の手を待ち続けている。一方、同市では厳しい現実を前に泣き叫ぶ人の姿もあった。



夫三友さんが取り残されている自宅を訪れた浅田妙子さん。「夫が見つかるまで泣かずにいようと思う」と気丈に話した＝3日午前10時52分、石川県珠洲市

おせちを食べ終わり、三友さんが遊んでいる孫たちを見ていた時、地震が発生した。「昨年の地震ほどじゃないね。三友さんとう言いつつ直後、経験したことのない激震が襲った。妙子さんは孫にならないテブルの下に隠れ、難を逃れた。だが一回目の地震で別の部屋に物が落ちていなかを見に行った三友さんは、崩れた自宅の中に残された。

辛うじて命をつないだ人も、揺れと津波の恐怖、町の荒廃を目の当たりにし、憔悴していた。「後ろを振り返ったら駄目だ」という一心だったと、津波からの避難を振り返るのは同市の喜多麻沙美さん(45)。貴重品を取りたいのか、自宅に戻ろうとする高齢者を必死に説得する声や「とにかく上に逃げろ」という怒号が町中上がったという。

建設の仕事をしていた三友さん。退職し、夫婦2人で暮らしていた。知り合いとお茶をする憩いのスペースにするため、蔵を取り壊した際、「三友さんのためなら」と知人の業者が格安で工事を引き受けてくれた。「私は『駄目夫』だと思っていたが、『三友さんみたいになりたい』と言われるほど友達に愛され、大切にされていた」

完全した住宅では、がれき脇に毛布をかけた遺体が横たわっていた。降り続く雨が当たらないように、傘を広げている。周りに集まる人たちから離れて、男性が大声で泣いていた。

「お父さんが見つかるまで泣かないように頑張る」と気丈に語った。周辺沿岸部の集落では、小学校などコンクリート製の建物を除きほとんどがべしんこに崩壊している。「かわべさん、聞こえますか」。消防隊員が家屋に取り残された住民の名前を叫びながら捜索活動が続ける。

〔問①〕 大きな災害に対し、どんな備えが必要だと思いますか。(介助、共助、自助)